未来に残せ、海の宝石箱

編集協力
愛南サンゴを守る会
西尾知照（ともてる）会長

県内最大規模のサンゴの群落が広がり、高い透明度を誇る愛南町の沖合。陸上からは想像もできない愛南町の美しい海中の世界は、多くのダイバーを魅了しています。

この美しい海を後世に残すことは、海と共存する私たちの使命といえるのではないでしょうか。

サンゴは生き物たちのゆりかご

サンゴの群落では、多くの生きものたちがお互いに依存し合って生きています。サンゴを食べる動物、サンゴの枝のすき間を隠れ家として利用する動物、サンゴの骨の中に埋まって身を守る動物などがサンゴ群落の中で暮らしています。

アケボノ
チョウチョウウオ

イバラカンザシ

オキ
ゴンベ

ウミタケハゼの仲間

セダカ
ギンポ

ササノハベラ

タキゲン
ロクダイ

観光資源として

サンゴの群落が広がる美しい海には多種多様な生きものが住み、本町でも観光資源として大きな役割を担っています。

愛南町では、泳げない人でも海中散歩を楽しめる「シーウォーカー」や海中展望船「ガイヤナ」・「ユメカイナ」のほか、スキューバダイビングなどで美しい海の景観を楽しめます。

シーウォーカー

海中展望船ユメカイナの船中

西海地域鹿島沖でのスキューバダイビング

サンゴは植物？

一見すると動きが全くないことから、サンゴは「植物」のようなものと考えている人もいるかもしれませんが、サンゴはイソギンチャクやクラゲと同じ刺胞動物と呼ばれる「動物」で、ポリプと呼ばれる小さなサンゴ個体がいくつも集まって群体を形成しています。

サンゴの体の中には、褐虫藻（かっちゅうそう）という植物プランクトンが無数に入っていて、褐虫藻が太陽光線を利用して光合成を行い、サンゴに必要な栄養を与えています。夜になると褐虫藻が光合成をしないため、サンゴ自体（ポリプ）が触手でエサをとって食べています。

ニホンアワサンゴのポリプ→

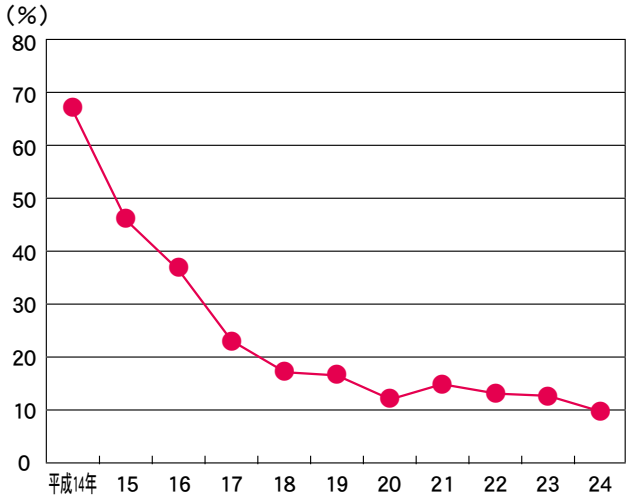
ジュウジキサンゴのポリプ。
触手でエサを捕らえて食事中です。↓

減少するサンゴ

平成24年に行われた調査によると、海底に占めるサンゴの割合を示す被度率が、鹿島（中ビシャゴ）で過去最低を記録しました。

サンゴが減少している原因として、レイシガイダマシ類などの巻貝やオニヒトデによる食害、温暖化に伴う海水温の上昇などが挙げられますが、海への家庭ごみの廃棄や生活排水の流出も原因の一つとなっています。

鹿島（中ビシャゴ）のサンゴの被度率の変化



褐虫藻がいなくなり、色を失い白化したサンゴ。褐虫藻は、水温が30℃を超えたり、サンゴが何らかのストレスを受けたりするとサンゴの体内から逃げ出します。

サンゴを食い荒らすオニヒトデ。直径50cmほどにもなる大型のヒトデです。

愛南町でのサンゴ保護の動き

愛南町では、須ノ川、久良地区沖や鹿島周辺など各所にサンゴの群落が点在しています。この美しい海を守ろうと、「愛南サンゴを守る会」や「宇和海海中資源保護対策協議会」をはじめ、愛媛大学南予水産研究センターの学生、内海中学校の生徒たちなどがサンゴの保護活動を行っています

内海中学校の３年生は、総合的な学習の時間の取組の一つとして、自然やそこに生きる生物のすばらしさや環境を守ることの大切さを学ぶために海域モニタリグを行っています。モニタリングで、サンゴの分布状況（被度や病気のサンゴの有無など）を調べ、記録する中で、須ノ川海岸や鯖網代の被度が前年より少なくなっていたことが分かりました。

愛大南水研の矢作由利子（ゆりこ）さん（海特コース４回生）は、南水研の学生有志に協力してもらいながら、うみらいく愛南周辺に広がるサンゴ群落の記録をとっています。この記録を基に、サンゴ保護につながる研究に関する基礎的な資料を作成しているそうです。

サンゴを食い荒らすオニヒトデは、ダイバーが薬剤を注射して殺処分します。巻貝類は、ピンセットで一つ一つ取り除きます。

未来へ

水質の悪化や温暖化による水温上昇など、サンゴが減少する原因には、短期的に対処が難しい問題も多くあるといえます。

しかし、ごみや生活排水を海に捨てないことや、温暖化に歯止めをかけるため、節電により二酸化炭素の排出量を減らすことは、私たちにもできることです。

サンゴの減少は、自然環境を破壊する私たちへの警笛の一つと捉え、この美しい海を後世に残すためにも真剣に考えるときなのかもしれません。

須ノ川沖では例年、旧暦の７月上旬から８月上旬の新月の頃、21時から22時30分の引き潮の時間帯に産卵が確認されます。この新しい命を守ることが、美しい海を守るということです。